

自然体験活動が子どもに与える有効性について ～社会教育施設で行われる継続した体験活動を通して～

中川 保敬*・草野 柊**・井福 裕俊*・小澤 雄二*
齋藤 和也*・坂本 将基*

About the validity by which a natural experience campaign gives it to a child
— Through the continued experience campaign performed at social educational facilities —

Yasutaka NAKAGAWA, Shu KUSANO, Hirotooshi IFUKU, Yuji OZAWA,
Kazuya SAITO and Masanori SAKAMOTO

キーワード：自然体験活動，幼児，生きる力

I. はじめに

現代の子どもたちについて、文部科学省¹⁾では「生きる力」を育む教育に重点を置いており、幼児期の子どもの教育においても同様に行われている。幼稚園教育要領²⁾において、「幼稚園は家庭との連携を図りながら、幼稚園教育の基本に基づいて展開される幼稚園生活を通して、生きる力の基盤を育成するよう学校教育法第23条に規定する幼稚園教育の目標達成に努めなければならない。幼稚園はこのことにより、義務教育及びその後の教育の基盤を培うものとする」としている。幼児期をいかに過ごすかによって、子どもの成長に大きくかわって来るとされている。

自然体験活動は、子どもたちの「生きる力」に一定程度の良い効果をもたらすことが各種調査等から報告されており、特に幼児期の子どもの自然体験活動は「自然への畏敬への念、直接体験による興味関心の増進、自他への気づきが生まれる」とされ、教育改革国民会議報告³⁾において提言されている。しかし、現代の子ども（幼少期）の「自然体験」の経験についての調査を見てみると、平成22年時点の中学2年生の方が、高校2年生よりも幼少期から小学生期までに自然体験をしている割合が減少しており、年代が若い子どもの方が体験の機会が減少してきていることがわかる⁴⁾。

自然体験活動には、「生きる力」の向上に一定程度の効果があるとされ、体験活動イベント1回の調査やキャンプについての研究は行われているものの、

幼児を対象にした通年型のイベントについての調査は少なく、継続して行うことについて、また回数によって「生きる力」を構成する「心理的社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」の3指標にどのような影響を与えるのかについてはあまり報告されていない。

そこで本研究では、調査地である熊本県立菊池少年自然の家が、幼児をターゲットに行っている連携事業を調査対象とし、事業回数が3回と5回とでは「生きる力」の3指標「心理的社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」にどのような違いをもたらすのかについて明らかにすることを目的とした。

II. 方法

1. 調査対象

「幼稚園保育園連携事業」に参加した2園の年長組の子どもとその保護者及び引率の教員について質問紙を用いて調査を行った。

活動回数3回のJ幼稚園を活動Aとし、活動回数5回のK保育園を活動Bとした。

2. 調査期間及び場所

平成29年5月初旬から12月下旬にかけて、熊本県立菊池少年自然の家とその周辺施設で活動を調査・分析した。

3. 調査内容

橋、平野⁵⁾が開発した「生きる力」を測定するための70項目（非依存性、思いやり等の14指標×5項目）を基に、簡便にアンケート調査をするために絞り込まれた28項目（14指標×2項目）で構成されたIKR評価用紙（簡易版）を用いた。さらに引率の指導教員への自由記述の質問項目（4項目）を加

* 熊本大学大学院教育学研究科

** 熊本大学大学院教育学研究科修士

えて調査を行った。IKR 評定用紙は、それぞれの項目について、6点（とてもよくあてはまる）～1点（まったくあてはまらない）の6段階で点数化した。

4. 調査データの統計的な処理方法

回収した有効票を「統計分析フリーソフト R」を用いてフリードマン検定を行い、有意であればシェッフェによる多重比較検定を行った。有意水準は $p < 0.05$ 未満とし、 $0.05 < p < 0.06$ で有意傾向があるとした。教員アンケートは、自由記述の中から事前と各活動後調査とで、子どもたちがどのように変化したかを比較検討した。

Ⅲ. 結果と考察

図 1 は、活動 A・B それぞれの活動開始前の平均得点について比較したものである。「心理的社会的能力」は54.0点と63.4点、「徳育的能力」は32.6点と38.1点、「身体的能力」は21.9点と24.1点であり、3指標いずれの間にも、平均得点に有意な差は見られなかった。活動開始前時点では、J 幼稚園・K 保育園とも「生きる力」は変わらないことがわかった。

今回行った活動は、J 幼稚園が 3 回、K 保育園が 5 回であった。J 幼稚園については、活動は 4 回であったが、第 4 回の活動実施が年度末であり、データの分析が困難であったため、3 回目までの活動を集計した（活動 A とする）。K 保育園は、集団での宿泊体験をする為に導入した 5 回の活動を行った。（活動 B とする）。

表 1-1, 2 は、今回行われた活動内容を表したものである。□（枠囲み）の活動は主に“身体活動を伴わない”活動、それ以外は“意図的に身体活動を行うもの”と区別する。“身体活動を伴うもの”と“身体活動を伴わないもの”の比率は活動 A・B 共に約33%であり、活動の数に差はあっても、活動の持つ特性やねらいについては、概ね同じような内容であると考えられる。

また、“身体活動を伴わないもの”については、「心理的社会的能力」「徳育的能力」の 2 指標の向上について、また“身体活動を伴うもの”については、「心理的社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」の 3 指標の向上について影響を与えるものとして設定された活動である。

子どもは、自然体験活動つまり冒険や探検や遊びを通して、創造性、適応性、選択性、巧緻性、敏捷性、想像性、平衡や調整の感覚、判断力、瞬発力、持久力などを豊かに身に付けてゆく（柴田 1980）。また、自然体験は美的な感性を養うだけでなく、厳しさ、忍耐、努力、ストレスへの耐性を学ぶことが

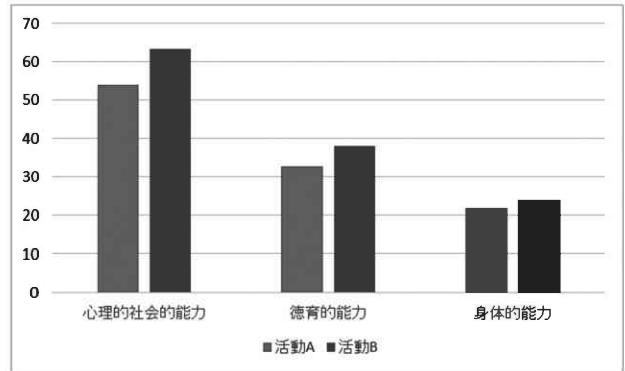


図 1 活動 A・B の活動開始前平均得点の比較

表 1-1 活動 A の内容

回	内容
1	自然を感じるビンゴ, <input type="checkbox"/> ハンカチづくり, 竹切り体験, そうめん流し
2	川遊び, いきものさがし, ニジマスつかみ
3	<input type="checkbox"/> クリスマスリースづくり, <input type="checkbox"/> 親の学びプログラム

表 1-2 活動 B の内容

回	活動Bの内容
1	ハイキング, いきものさがし, <input type="checkbox"/> 天狗杉に触れる, <input type="checkbox"/> 天狗との会話
2	川遊び・沢登り, スイカ割り, テント設営, 夕食 づくり, 草そり体験, キャンプファイヤー, <input type="checkbox"/> カー <input type="checkbox"/> トンドッグ, 天狗の家づくり, <input type="checkbox"/> 天狗との会話
3	川あそび, ニジマスつかみ, <input type="checkbox"/> 天狗との会話
4	親子で鞍岳登山
5	落ち葉プール遊び, 焼き芋, <input type="checkbox"/> 焼杉のフォトプレー <input type="checkbox"/> △, <input type="checkbox"/> 天狗とのお別れ

※ の枠囲みは“身体活動を伴わない”活動とする。

でき、それが他人の苦しみ、痛み、悲しみもわかることにつながる。他者理解の始まりは自然体験にある（山田 2000）。自然体験活動は子どもたちの「生きる力」に有効であることが明らかにされていたが⁴⁾、本研究においても、それを支持する結果となった。

1. 【活動Aについて】

7か月に3回の活動を実施した内容を分析した結果、非依存性、積極性、明朗性、交友・協調、現実肯定、視野判断、適応行動の7指標からなる「心理的社会的能力」において活動開始前54.03点から第3回活動終了後59.48点に向上が見られ、その平均得点に有意傾向が見られた。また、同じく第2回目活動終了後54.34点から第3回活動終了後59.48点へ平均得点に有意傾向の向上が見られた。自己規制、自然への関心、まじめ勤勉、思いやりの4指標からなる「徳育的能力」、日常的行動、身体的体制、野外生活・技能の3指標からなる「身体的能力」について有意な差は見られなかった。

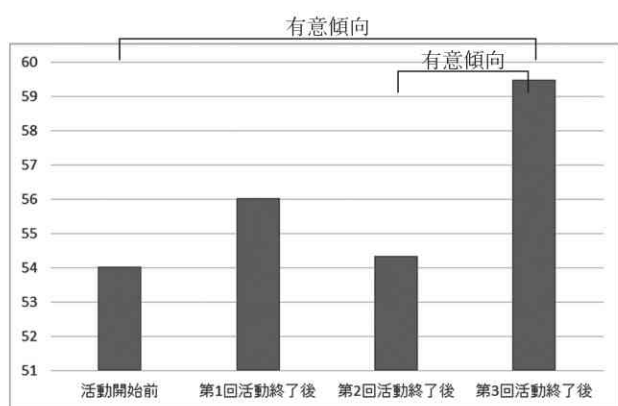


図2 「心理的社会的能力」の平均得点変化 (J 幼稚園)

このことから、幼児を対象にした3回の自然体験活動についてはプログラム計画において「生きる力」の特に「心理的社会的能力」を向上させるのに有効であることが示唆された。

2. 【活動Bについて】

7か月に5回の活動を実施した内容を分析した結果、心理的社会的能力において、得点は活動開始前63.4点から第5回活動終了後71.2点に向上し、その平均得点に有意傾向が見られた。また、第3回活動終了後63.0点から第5回活動終了後71.2点に向上し、得点に有意な向上が見られた。身体的能力については活動開始前24.1点から第5回活動終了後30.4点向上し、得点に有意な向上が見られた。また第2回活動終了後25.7点と第5回活動終了後30.4点へ、得点に有意傾向を示した。ただし「徳育的能力」については有意な差は見られなかった。

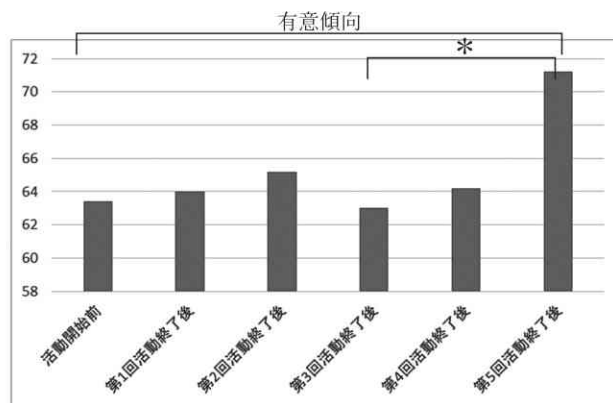


図3-1 「心理的社会的能力」の平均得点変化 (K 保育園)

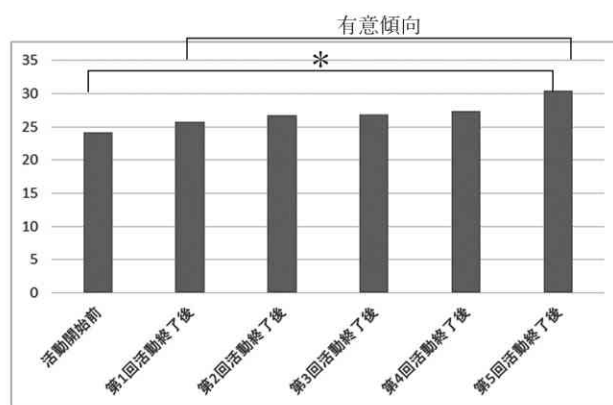


図3-2 「身体的能力」の平均得点変化 (K 保育園)

3. 【活動内容の違いから見た比較】

活動Aと活動Bについて、それぞれ活動開始前と第3回活動終了後を比較してみると、活動Aでは「心理的社会的能力」に有意傾向の変化がみられた。活動Bでは3指標すべて、3回目までは変化が見られなかった。

活動Aの第3回では、「クリスマスリースづくり」「親の学びプログラム」が行われた。活動を3回実施したJ保育園の「心理的社会的能力」に有意傾向が見られた要因として、「心理的社会的能力」を構成する下位指標の「現実肯定」の活動開始前と第3回活動終了後の得点が8.55点から9.41点に向上し、有意差が見られた。その要因は「親子の共同作業を通して、絆を再確認し、家庭教育を見直す機会とする」ことがねらいの、「創作活動(クリスマスリースづくり)」「親の学びプログラム」が関係したと考える。親と子が同じ活動を共にし、子どもたちの変化が保護者にわかりやすかったことで、得点が向上したと推察される。

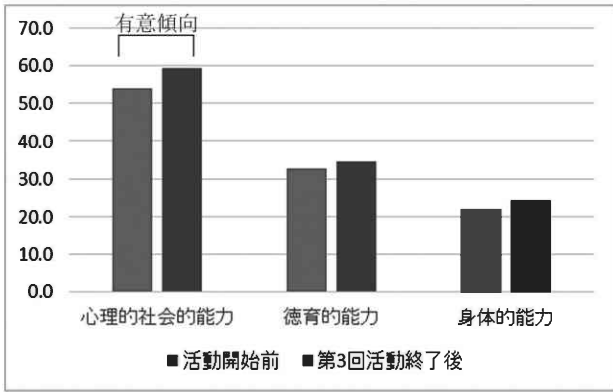


図4-1 活動Aの活動開始前と第3回活動終了後の平均得点変化 (J幼稚園)

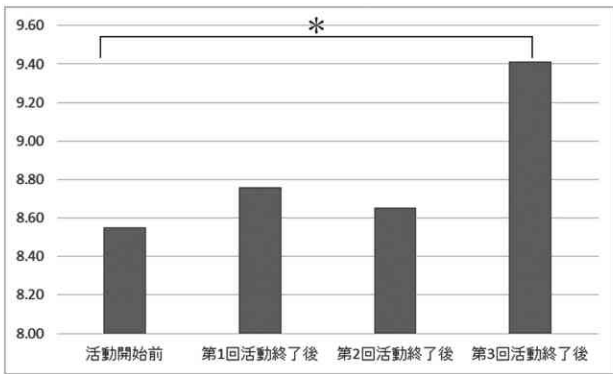


図4-2 下位指標「現実肯定」の平均得点変化 (J幼稚園)

活動Bの第2回では、「夏の自然体験活動を存分に味わうことで、自然の中で遊ぶことの楽しさを知る。1泊2日のお泊り保育で集団生活を経験し、小学校へ上がる子どもたちの経験とする」ことを活動のねらいとし、「沢登り」「天狗との会話」が行われていた。第3回では、「ニジマスつかみを通して、命の大切さ、尊さを学ぶ」ことをねらいとし、「川遊び」「ニジマスつかみ」「天狗との会話」が行われた。第2回と第3回の活動は川を使って行われたものであり、ねらいは異なるものの、活動の内容は類似していたため、子どもたちの変化が見えにくかったと推察される。

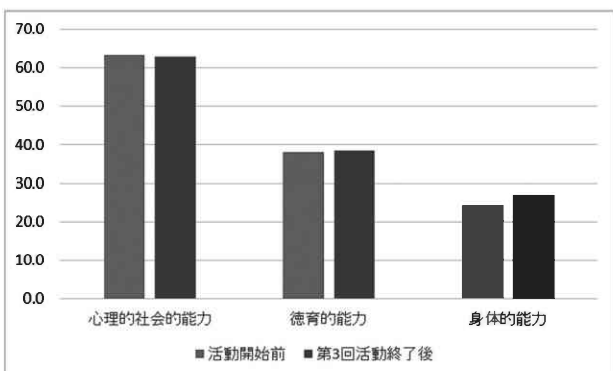


図4-3 活動Bの活動開始前と第3回活動終了後「生きる力」平均得点変化

4. 【活動回数の違いから見る比較】

活動Aについては、活動開始前と第3回活動終了後の平均得点を比較すると、「心理的社会的能力」が54.0点から59.5点となり、有意傾向の向上が見られた。活動Bについては、活動開始前と第5回活動終了後の平均得点を比較すると「心理的社会的能力」が63.4点から71.2点へと、有意傾向の向上が見られ、「身体的能力」が24.1点から30.4点に向上がみられ、有意差を示した。活動回数が増えたことで、「生きる力」を構成する3指標のうち、2指標に向上がみられた。この結果より、子どもの「生きる力」を向上させるためには、3回のプログラム計画よりも5回のプログラム計画の方が「生きる力」を向上へと導くことへつながると考える。

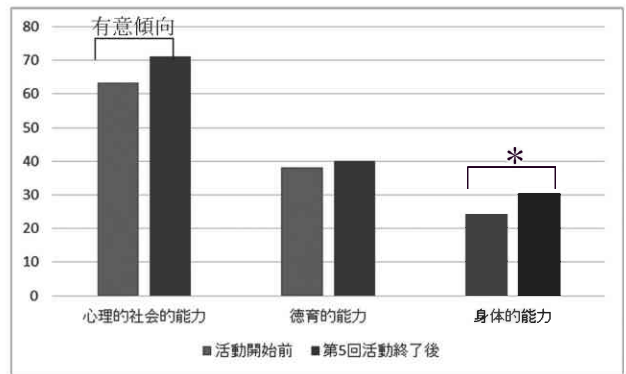


図5 活動Bの活動開始前と第5回活動終了後の平均得点変化

IV. まとめ

本研究では、自然体験活動の実施回数の違いが子どもの「心理的社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」にもたらす変化について明らかにすることを目的に進め、次の知見を得た。

①活動回数が3回よりも5回の方が、3指標のうち2指標に向上が得られ、体験回数の増加は、子どもの「生きる力」の向上に有効であることが示唆された。

以上のように、継続的な自然体験活動は、幼児期の子どもの「生きる力」の特に「心理的社会的能力」「身体的能力」を有意に向上させる効果があった。幼児期の子どもたちにとって、このころから自然体験活動を多く経験することは、その後の人生の学歴や就職先、収入においても有意義に働くことがわかっている⁶⁾。自然の中で遊ぶことの楽しさや面白さ、命の大切さや自然があることの喜びなどの多くを子どもたちに提供することが重要である。

今後の課題として、以下の点が挙げられる。

①3回、5回の2パターンの調査にとどまったため、

7回, 9回と体験回数の増加が, 「生きる力」の指標にどのような変化があるのかを検討していく必要がある。

- ②調査の対象となった子どもたちの母数が少なかったことから, より多くの子どもたちを対象として, 調査を行う必要がある。
- ③「徳育的能力」の数値が有意に向上しなかった。今回の活動の内容が, 子どもたちの「徳育的能力」に干渉するものでなかったことが原因として考えられるため, 「徳育的能力」向上のためのプログラムの開発も重要である。

V. 引用・参考文献

- 1) 小・中学校学習指導要領(平成24年改訂)
- 2) 幼稚園教育要領(平成20年改訂)
- 3) 教育改革国民会議報告(2000)「教育を変える17の提案」
- 4) 文部科学省(2009)「農山漁村での長期宿泊体験による教育効果の評価結果について」
- 5) 橘直隆・平野吉直(2001)生きる力を構成する指標, 野外教育研究第4巻第2号, 11~16.
- 6) 独立行政法人国立青少年教育振興機構2010「子どもの体験活動の実態に関する調査研究より」
- 7) 独立行政法人経済産業研究所(2014)「幼少期の家庭環境, 非認知能力が学歴, 雇用形態, 賃金に与える影響」
- 8) 国立教育政策研究所(2013)「生きる力を育成するための自然体験活動を重視した環境教育に関する一考察」
- 9) 柴田敏隆(1980)子どもの人間形成と自然環境の教育的機能教育展望, 教育調査研究所, 26(7): 72-82.
- 10) 山田卓三(2000)生物が教える「そつたく同時」の子育て月刊『MOKU』, MOKU出版, 10: 54-61.